

連歌と俳諧における雅俗の問題：守武・貞徳・宗因・芭蕉をめぐって

島津，忠夫

<https://doi.org/10.15017/4755933>

出版情報：雅俗. 1, pp. 2-20, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



連歌と俳諧における雅俗の問題

——守武・貞徳・宗因・芭蕉をめぐって——
《特集 雅俗の諸相》

島津 忠 夫

一 はじめに

このごろ、歌壇では、野間阿太子氏編『現代連歌集』（平成五年四月、砂子屋書房刊）が出て、いささか連歌のことが話題になっている。私は、その書に依頼されて、「現代連歌」と連歌の話」という一文を寄せたが、その中で、

「現代連歌集」という本が刊行される。山中智恵子氏をはじめ錚々たる歌人を擁して実に熱心に試みられている。ただ、私たち連歌研究者の目から見れば、これは「現代連歌」であって、連歌とはいささか異なっているといわざるをえない。

と記している。また、ここ数年来、大阪市平野区杭全神

社の法楽連歌の再興に参加して来たが、このほど『平野法楽連歌——過去と現在——』（平成五年十月、和泉書院刊）という形でまとめられた。ここでも、「現代の連歌とは何なのか。連句とはどう違うのか」ということを求められて、「連歌の話」と題して私の見解を平易に述べておいた。明治以来、ほとんど当代の文学としては見離されて来た連歌や連句の付合文芸が、昨今やや見直されて来ている現象をここに見るのであるが、歌人たちが集まれば連歌と称したがる傾向があり、連歌と連句はまったく混同されてしまっている。連句の方では、現代連句という美濃派のしきたりを継承する人たちのほかに、作家や評論家などを連衆とする文人連句ともいふべき一連の作品が注目を浴びており、いま新しく編纂中の『俳文

学大辞典』には、「現代連句」「文人連句」などの項目が用意されているのも、そうした現状をふまえてのことである。

ところで、連歌と連句の相違を知るためには、歴史的に連歌と俳諧の歴史を振り返ってみる必要があることはいうまでもない。連歌は百韻を主体とし、連句は歌仙が多いという傾向はあっても、形態はまったく同じであるといつてよい。初期の俳諧はもと「俳諧の連歌」であつて、連歌の一体と見るべきものであつた。『竹馬狂吟集』から宗鑑・守武までを「俳諧連歌」と考え、「初期俳諧」では貞門・談林の俳諧を総称しようと考えるのが、連歌史の立場からの見方であるが、この点に関しては、さきの『俳文学大辞典』の項目作りに当たつて、「俳諧連歌」と「初期俳諧」につき、編者の尾形仇氏と私との間で、多少の見解の食い違いがあり、尾形氏が、「初期俳諧」では『竹馬狂吟集』から宗鑑・守武までを考えられ、以下、貞門・談林・蕉風へという展開を想定されるのは、俳諧史の立場からは、これも当然のことであると思う。

連歌と俳諧の相違については、私の執筆することになっている『俳文学大辞典』の「連歌」の項の原稿の一部を掲げておきたい。

俳諧は俳諧の連歌で、連歌に百韻が多く、俳諧には歌仙が多いということもあるが、形式としては本質的に変わらない。連歌も発生当初は和歌に対して俳諧性を多分に持っていたが、正風連歌が主になつて来るにつれて、改めて室町中期に俳諧連歌が試みられるようになったもので、連歌と俳諧との違いは、連歌が雅語によるのに対して、俳諧は連歌に用いない俗語や漢語の類を用いることにある。俳諧の発句が独立して俳句と呼ばれるようになって以後、連歌や俳句と区別して連句の呼称が用いられるが、連歌と連句とは形態としては同じといつてよく、その違いは内容と表現によるのである。

なお、この辞典では、新しく「江戸時代の連歌」の項を立てることにしているが、その執筆予定の原稿は、まず「文学史的には俳諧にその地位を譲った時代」と規定し、二期に分けて、

(1)前期 里村家が代々続いて幕府より知行を受け、柳営連歌を勤めるとともに、諸所の連歌に宗匠として君臨することになる。連歌はなお盛んで、昌琢門から重頼や宗因が出、貞門・談林の俳諧の時代は、連歌と俳諧とともに嗜む人が多かった。里村家では昌琢・昌程・昌陸、西山家は宗因・宗春が活躍。諸所に連歌の愛好者があり、互いに交流が見られる。

(2)後期 蕉風俳諧が諸国に蔓延して以後は、もはや連歌と俳諧をとともに嗜む風潮はなくなり、連歌は、柳営連歌や、太宰府天満宮・北野神社・大阪天満宮などの法楽連歌・祈禱連歌として続けられてゆく形となる。ただ、文化・文政期の滋岡長松や天保期の山田通孝のように資料として連歌を集成書写し、編纂するなどの試みが見られる。

と記している。さらに、「連歌史」の項の一部をあげておくと、

室町末期から江戸時代の始めにかけての天正・慶長の時期は、紹巴を中心に連歌は現象としては最盛期

の様相を呈する。ただ、実質的には作品そのものに大きな進展を見ないままに停滞し、連歌の固定化へと衰退の道を辿ることとなり、文芸としては新しく興った俳諧に譲ることになる。それでも元禄のころまでは俳諧とともに連歌もなお盛んであった。蕉風俳諧が諸国に広まるにつれて連歌はますます形骸化し、柳営連歌や、特定の社寺の法楽連歌として行われるのみとなり、それも明治期に入ると急速に衰えて、社寺の法楽連歌も昭和十年代にはほとんど行われなくなる。

連歌と俳諧の相違についての私の見解は、これで大略を尽くしていることになる。

かつて、私は、「連歌と俳諧と——紹巴以後に関する一考察——」の論考(注1)で、近世初期においては、連歌と俳諧とが同じ人によってよみ分けられていたこと、連歌の基盤の上に俳諧が発達してゆくこと、および宗因における連歌と俳諧について、当時はもっぱら在九州の資料などを中心に用いて具体的に見ようとしたことがあったが、ここではもう少しその後に見た資料などを敷衍し

ながら、改めてこの問題を考えてみたいと思うのである。

二 荒木田守武と、その後の伊勢の連歌俳諧をめぐって

俳諧史の上で、宗鑑と並称されている荒木田守武の本業は連歌にあつて、俳諧は一種の楽しみごとであつた。

『守武千句』の試みは、綿屋文庫蔵の『守武千句草案』を重ね併せることによって、その制作の意図と苦心が知られる。すでに大谷篤蔵氏による「守武千句草案校勘略説」（『国語国文』昭和二十八年四月）の論考や、『古俳諧集』（天理図書館善本叢書）の解題に指摘されているように、草案の中に、「天文五年雪のふるころ」の句があつて、それが成稿本の追加の挙句に「天文九年しぐれふるころ」となつて生かされていることより、この完成に長い年月を要し、跋文に、

大かた千句は三日なれば、これわづかに二日にもたらざらん、おもひの外に永びき、夜はねざめがちにもよほし、かのえさるには二百いんにて、五日につづりぬ。

とあることが、実は「通常の千句のごとき成立を装うた

めのカモフラージュの手段」（同氏解題）であることが知られるのである。守武には後に『伊勢正直集』に所収を見た享祿三年正月九日の独吟俳諧百韻があり、この頃から特に俳諧の連歌に深い関心を示していたことと思われる。『守武千句』は、後に慶安五年の版本が出て広く流布し、俳諧史の上に大きな意義を持つ作品となつたが、当初は極めて私的なもので、連歌の余興としての試みであつた（注2）。かつて、「守武千句をめぐつての二三の問題」（注3）にも触れたが、草案の中には、『犬筑波集』の作品に通う卑猥な作が見られたのが、成稿本では改作され、避けられていることや、草案にある、

春の夜は僧とびくにをこきまぜて
ちやうとかすみのころもかきあげ
さほ姫のしとする音はきりはたり
夕かげくらうさぞたくむらん
の句が、成稿本では、第九の名残の折第三句目から、
春はたゞ僧とびくにをこきまぜて
夏はいづくに具して行そら
時鳥なくはなんだやこほるらん

夜はまたくらうさこそひまなき

という形になっていて、「きりはたり」の語だけが第一の挙句の前の句に「きりはたり長命丸やあはすらん」の形で取り込まただけで、中二句はまったく差し替えられているのであるが、その捨てられた二句からは、明らかに『犬筑波集』巻頭の句の影響が顕著である。成稿本の跋文にも「宗かんよりたび／＼発句などくだし侍り」とあり、まだ『俳諧連歌抄』として写本で流布していた頃の『犬筑波集』の一本を、守武が見ていたことが考えられ、それに刺激されて二句の付合としてではなく、百韻、さらには千句という形を試みようとしたものと思われるのである。しかし、守武にとっては、連歌が本業であることは、『荒木田守武集』（昭和二十六年、神宮司序刊）に所収されている『宗長追善千句』（享禄五年三月四日）『賦何路連歌』（天文十一年六月十二日）『秋津洲千句』（天文十五年八月二十五日）などの作品からも知られるし、何よりも「天文九年庚子十二月廿五日」の奥書のある『合点之句』に、長き生涯にわたって詠み続けた連歌の作品の中から、諸先達の合点を得た句を抜き

出している態度からも知られる。その『合点之句』のところでどこに見られる前書からは連歌精進のさまが如実にうかがわれ、早く二十三歳の折の明応四年に成立した『新撰菟玖波集』に、兄の守晨とともに、すでに一句の入集を見ているのである。

伊勢神宮神官の連歌については、奥野純一氏に『伊勢神宮神官連歌の研究』（注4）の名著があり、詳しく考察を加えられている。荒木田氏の代々は連歌を本業とし、とくに西山宗因を招いて連歌の興行に励んだ内宮神官荒木田氏富の活動も顕著であった。

また、守武以後も伊勢では早くから俳諧が盛んであり、寛永十年刊の『犬子集』では、伊勢山田の人が百人も見え、京都の五十一人、堺の十九人を凌いでおり、山田住の盲人で勾当の官を持っていた望一が、発句三十三句、付句三十五句の入集を見ている。望一には『守武千句』に倣った『望一千句』が知られているが、同じく山田の人で、望一・孝晴と並んで初期伊勢俳諧の中心人物であった松田利清にも俳諧の千句が存在する。利清は、『犬子集』にも、伊勢山田の人としては望一について多い発句

十六句が入集し、慶安三年に伊勢山田八日市で開板された『伊勢山田俳諧集』には、望一・孝晴とともに俳諧独吟百韻が収められていて、互いに合点を加え合っており、『俳仙三十六人集』『俳諧百人一句』にも選ばれている当時知られた俳人であった。その作品は諸書に入集の発句や付句のほかは、その『伊勢山田俳諧集』所収の「山を包み海にふたする霞哉」を発句とする百韻が知られていただけであるが、その利清の独吟千句が大阪天満宮文庫に存する。江戸初期写の横本一冊で、すでに『大阪天満宮御文庫和漢書目録』にも記載されていたが、岡延宗（南曲）書写奉納の連歌叢書や、滋岡家旧蔵本ではなく、「南邨文庫」の印記があり、天満宮にいつの頃か奉納されたもので、しかも目録には「連歌」の分類の中に入っていたために見落とされて来たようである。第一百韻は「猫何」の賦物で、試みに、表八句をあげると、

四方に春立はたかれる日あし哉

しとをするくつかふわか水

呀かへるけさの朝茶をのみさして

火のけかわるといふそきこゆる

たれかはたけかるゝ身とは成ぬらん

へちやの戸口明そむるおと

見る月の友たかへしてよひおこし

あたゝめ酒にゑひほうけたり

といった作風であり、跋文には、

春の雨降つゝきいとくさのいほりのつれくなるまゝに発句ひとつふたつ夜いたし朝夕の口に任せぬれははからざるに千句となり侍りぬ外見は（三）脱也かしなからある初心の人むりに所望いなひかたくて書とゝめ侍るもの也

聞ゆるしみゆるしたまへむさくつとものこと

はのちりやはいかい

と記している。これも、『守武千句』を意識していることは明らかであるが、跋文をそのままの意ととれば、私的な偶然的なものであったと考えられ、その作風も極めて素朴で、「俳諧の連歌」というにふさわしく、初期俳諧の様相をよく示している。望一に『伊勢俳諧大発句帳』の撰のあったことは、その抜書の『伊勢俳諧大発句帳抜書』から知られ、さらに伊勢では『伊勢俳諧新発句集』

『伊勢俳諧長帳』『伊勢正直集』の撰集が編まれ、俳諧はその後も盛んであった。荻野秀峰氏は「初期俳諧の形成についての一考察」(注5)で、摂津平野の杭全神社の例などもあげて、「熱田、山崎そして伊勢山田の俳諧が初期俳諧成立にはたした役割をみれば寺社を中心とした連歌、俳諧の流れ、そしてその享受層こそ初期俳諧の急速な全国的流行と普及をになった大きな基盤であつたといえよう」といわれている。熱田の場合は、前稿でも簡単に触れたし(注6)、平野の杭全連歌については、『平野法楽連歌——過去と現在——』に譲って、ここでは触れないが、この初期俳諧における寺社の基盤の大きかったことの指摘は注目しておいてよからうと思う。

三 連歌から俳諧へ——松永貞徳の場合——

松永貞徳は、武人出の連歌師永種の子として生まれ、十二歳の天正十年の二月十八日には、九条種通から『源氏物語』の秘伝を受けた折の竟宴の連歌があり、以下勝熊の名で、文禄二年の頃まで連歌の一座に連なる。一方、

和歌にも精進し、早く天正の末年から文禄初年にかけての歌集『逍遊軒和歌』一卷があり、小高敏郎氏は、天正十六年(十八歳)から文禄元年(二十二歳)までの伝を「若き歌人、連歌作者」として記している(注7)。貞徳が俳諧に興味を懷くようになるのは、慶長十年前後の、当時京都の車屋町に住んでいた晩年の細川幽斎のもとを訪れて俳諧の前句付を楽しんだことなどに始まるようである(天水抄)。寛永十五年に書かれた『鷹筑波』の貞徳の跋に「みとせあなたより、丸に見せ合せられしはいかい共をとりあつめみれば」とあるのを、文字通りに逆算すれば、慶長十三年、三十八歳の時に当たっている。当時の俳諧は、まだ連歌の余興として楽しまれていたに過ぎなかったが、寛永五年の五十八歳の年には、斎藤徳元が貞徳を訪れて「都三条衣の棚に、貞徳とてすぎきものあり。かれが庵室へ音信侍りければ」(塵塚俳諧集)と記しているから、この頃にはようやく俳諧好きの評判が立っていたことが知られる。この年の十一月の末には、寺町の妙満寺で、貞徳を囲んで正式の俳諧の会があつたという(貞徳永代記)。寛永十年、貞徳門の松江重頼撰

の『犬子集』の刊行は、俳諧流行の機運を飛躍的にすることになるが、『犬子集』の時には、町の歌学者をもつて任じていた貞徳は、なお俳諧の撰集刊行に消極的であった。それが、貞徳門を離れた重頼や立圃が撰集活動を展開する情勢の中で、やがて直系の西武に『鷹筑波』（寛永十九年刊）を、良徳に『崑山集』（慶安四年刊）を編ませ、自らも寛永二十年には『新增犬筑波集』を刊行するに至るのである。その時、貞徳はすでに七十三歳に達していた。

貞徳の俳諧の基礎は、『戴恩記』の中に自ら語っているように、紹巴の門に入り、「かの会下に四五ヶ年稽古」し、紹巴も「一かど有はれの会に、必ず連衆には加へ」たという連歌修行の時期があったことに根ざしている。貞徳は、俳諧を俳言をもって作る連歌と規定する。「俳諧は即百韵ながら俳言にて賦する連歌なれば」という『増山井』の季吟の言葉が、安易に貞徳の俳諧観として論じられることが多かったが、これは以下に「端つくりをも俳諧之連歌と書べきなり」と続く文脈で捉えなければならぬことについては、乾裕幸氏の「俳言」の論

——初期俳諧におけることばの問題」（注8）に指摘される通りであり、俳言の意義についても、その乾氏の論考に詳しい。貞徳は雅語をもって詠む連歌に対して、俗語をもって作り、或いは俳意を盛ることに於いて、連歌とは異なる「俳諧之連歌」を主張するのである。

貞徳の俳諧の作品は、『犬子集』に三百五句も採られているのをはじめ、諸集に多く見え、独吟の俳諧や『紅梅千句』などの一座した作品が現存する。私などは、早くから『角川古語大辞典』に関わっていて、『犬子集』以下の俳諧撰集を、もっぱら語彙を拾うために句のみを拾い読みをすることが多いのであるが、時々はっと巧みな句に出会い、作者を見ると「長頭丸」とあることに改めて感ずることがしばしばであった。

玉札の飛脚か急ぎ帰雁

皆人のひるねのたねや秋の月

百とせの姥等も小町おどり哉（以上『犬子集』）

夏の夜やふるき築地の鼠穴

歌いづれ小町踊や伊勢踊（以上『崑山集』）

など、いずれにも言葉に対してのセンスのよさが見られ、

貞徳が言語感覚に鋭い人であつたことが知られる。

『新增犬筑波集』は、「油槽」「淀川」の上下二巻より成り、「油槽」では、『犬筑波集』の前句に新しく数句を付け試み、「淀川」では『犬筑波集』の付合に第三を付けて、『犬筑波集』の俳諧と寛永の新風の相違を示そうとしたものであつた。「油槽」の巻頭は、

霞の衣すそはぬれけり

天人やあまくだるらし春の海

大ぶくを座敷うちへやこぼすらし

春立てふむ雪汁やあがるらん

で、この貞徳の付句を、『犬筑波集』の「さほ姫のはるたちながらしとをして」と比較して、古くは俳諧性が薄れているとか、微温的であるなどと評されることも多かったが、これは、「淀川」の巻頭が、

碁盤のうへに春はきにけり

鶯のすごもりといふつくりもの

という『犬筑波集』の付合に對して、

此句、今ならば作物といふ字入べからず。これは同意になる也。其比も連歌師れきれきにて、かやうの

吟味はあるべきに、この撰者さほどの事をわきまへざる人にはあらざるべし。予をしはかるに其時は連歌のための狂言なれば、用付同意も指合もわざとせむさくせず。一二句にてとよみになしてあそびとみえたり。いかに此集にあればとて、当時は不可用之。又名句どもに一句づゝ只今愚句を付そふる事、人の嘲を招く事ながら三句目の行やうを、初心の覚悟にせさせんため、なまづき成事ながら、かきくはへ侍る。

として、

まづはにせたり雪の梅がえ

の句を付け、

是は絵物師が台のものによくせて、つくりたる作花となり。

と記していることから端的に知られるように、俳諧が『犬筑波集』のような二句の付合でなく、百韻の形に成熟して来たことを考えねばならないであらう。

「つくし人こそいつはりをいへ／はこ崎のまつとはいへどよせもせず」の『犬筑波集』の付合の前句に對して、

「此句俳言なし」と難じているが、これは連歌として見てもごくありきたりの前句に、このように付けることによって俳諧となっている二句の付合である。貞徳は、その前句をも、どこまでも連句の中の一語として捉え、咎めだてしているのであって、付句に「いふと云字前句にあり」と難じているのも同様である。それに、

我身たゞよふおきの唐船

と付け、「はこ崎へは唐舟つくなり。よせもせずにとゞよふ舟と付たり」と「箱崎」に「唐船」、「寄せもせず」に「ただよふ」と付けたことを注しているが、この句には俳諧性はかえって乏しいといえよう。しかし、貞徳の意識では、「唐船」という漢語（俳言）を用いることによって俳諧となっているとするのである。それに「箱崎」に「唐船」の付合は、謡曲〈唐船〉に拠っていることも注意せられる。「尤もとこそ人を見るらん／下手のかく花と云字を夕ま暮」の『犬筑波集』の付合に対して、

日もながくしたんぎくの段

と付け、「ゆやの短尺の段に歌をかく仕舞あれば如此」と注しているが、「たんぎく」という漢語を用いている

こととともに、ここでも謡曲〈熊野〉を踏まえている。後に談林俳諧において謡曲の文句取りが盛んになるのに対して、これはいかにも貞門風の謡曲の踏まえようである。また、「山ほととぎすあなになく声／夏の夜の空を狐にばかされて」の『犬筑波集』の付合に対して、

五月やみにもやねありく人

と付け、「狂人やねを走ありく躰なり」と注しているが、これにはとくに俳言は見られない。ただ、前句に付く句意に俳諧性が見られるのであり、しかも、この句には『徒然草』第八十五段の「狂人のまねとて大路をはしらば則狂人也」の連想がありはしまいか。『徒然草』は、『百人一首』とともに、貞徳も講義し、当時、町の庶民の間での講釈を通して、流行を呼んでいた新しい古典といふべきものであった。

貞徳の俳諧は、雅語による連歌に対して、句々に俳言または俳意を持つことをはっきりと意識することによって、連歌とは異なる「俳諧の連歌」という新しいジャンルを打ち立てようとしているのである。

四 西山宗因における連歌と俳諧

西山宗因の場合も連歌より出発する。宗因は元和五年の十五歳の時より、肥後八代城代の加藤正方に小姓として側近に奉仕し、連歌の道に志し、元和七年より寛永六年まで、京都の加藤家伏見屋敷詰めを命ぜられ、里村家の学寮に出入りして、昌琢を師とし、連歌を学んだ。豊一の名で昌琢一座の連歌に多く加わり、寛永八年、二十歳の折には、「春につれ春をさそふや朝霞」の歳旦吟をよんでいる（『宗因発句帳』）。武將と連歌の伝統が、中世より続いていることは、たとえば、深溝松平氏の場合に如実に見られるが（注9）、この宗因の連歌修行は主家加藤正方の連歌好きと深くかかわっている。宗因は、正保元年、四十歳の時、はからずも主家退転に遭遇して京都に出て伏見に住み、正保四年九月、摂津国南中島惣社（大阪天満宮）の連歌所宗匠に迎えられるに至った。里村家の学寮に出入りしていた折、その学寮近くに住んでいた松江重頼とも交わり、昌琢の同門で、のちに俳諧をもっぱらとした重頼らとの交わりを通して、宗因も早

くから俳諧に興味をもっていて、大阪に居を移したはじめに、重頼・松山玖也・梶山保友らと俳諧百韻を催しているが、その後は、天満宮連歌所の宗匠として、中断していた月次連歌の復興に力を尽くし、承応元年二月二十五日には、菅家神退七百五十年万句の興行に宗匠として臨んでいる。明暦二年、五十二歳の折の大阪天満住の蔭山休安撰『夢見草』には、俳号一幽の名で、俳諧の発句五句、付句二句が入集しているが、その頃の天満住の俳諧作者としては、空存が百十句で断然多く、宗因の句は「連歌座に打越嫌ふ礎哉」などの句に見られるように、いかにも連歌師の余技であった。この年、天満宮内の仮寓から天満碁盤屋町の向栄庵に移り住み、新居の興行始めに「神やうけしつゐによるべの菊の水」（『宗因発句帳』）とよみ、連歌の道への思いを新たにしている。その新居の頃、重頼・以春・玖也・保友らと俳諧の百韻を興行したことは、さきに触れたが、宗因の俳諧への活動が活発になり出すのは、五十六歳になった万治三年の頃からであった。その頃には宗因の俳諧の名声はようやく顕著になっていたようで、万治三年四月撰の『俳仙三十六人集』

や、九月撰の『百人一句』にも「大坂の住 宗因」として、その名が見えるようになる。それは、万治二年に十八歳になった息子の宗春に「梅に先今朝ぞ開けし花の春」(『宗春発句帳』)の歳旦吟が見え、翌々寛文元年正月十一日には、宗春を伴って伊勢神宮に詣で、両吟賦初何百韻を法楽、ようやく天満宮連歌所宗匠の仕事も宗春に託することができるようになったことに起因しているようである。やがて若い俳諧仲間から新しい俳諧の代表として仰がれるに至り、延宝初年には、宗因みずからも俳諧に熱を入れ、いわゆる談林調の俳諧が形成されるに至るのである。その俳諧が、井原西鶴らの早口を競う矢数俳諧などに展開する延宝末年には、宗因はふたたび連歌に回帰してゆく。

宗因の俳諧は、長年連歌で培って来た骨法を踏まえ、かつ詩性ゆたかな人であったから、いかにも軽々と付けていながら、詩情が感じられる句が多い。中村幸彦氏『宗因独吟俳諧百韻評釈』(平成元年富士見書房刊)には、宗因の「口まねや老の鶯ひとり言」を発句とする独吟(『宗因七百韻』所収)一卷を取りあげ、詳しい評釈

が加えられているが、その著の「はじめに」の中で、氏は上田秋成の評価を踏まえて、宗因を「豊かな詩性」を持つ人と言われている。事実、私もかつて『梅酒十歌仙』の注釈を演習で取り上げた時にも、またいま大阪俳文学研究会で『天満千句』を輪読している際にも、そのことは痛感している。『梅酒十歌仙』は、樋口如見撰に成る延宝七年の刊本で、中川文庫蔵の孤本(『説林』昭和四十九年十二月に翻刻)であるが、如見の序によれば、大阪天満住の宗因・幸方・如見・旨恕と泉州尾崎住の尾蠅による五吟十歌仙で、宗因時に七十五歳、すでに俳諧に倦み、もっぱら如見ら門人が引き立てての興行であったことがうかがわれるが、それでも宗因の句にはさすがうまいと思わせられる句が多い。

ふところよりも鏡なんて

袖妻にかゝらざりせば娘の子

(第一、二折表五句目)

前句は懷から鏡などを取り出し、そっと自分の姿をうつしている娘のさまと見て、誰からも袖を引かれないから懷娘であつてと付ける。『後拾遺集』の「見るたびに

鏡の影のつらきかなからざりせばかからざりせば」の歌をさりげなく踏まえ、「ふところ」から「娘」を付けて、まだ親の手元から離れたことのない世間しらずの娘の意の懷娘に仕立てている。

跡職を息の下より申やう

たばこの灰のあだし野の原

(第二、初折裏六句目)

前句は跡目のことを苦しい息の下で遺言しているさまと見て、たばこの灰のように虚しく、「あだし野」の露と消えたとする。前句は打越から続いた謡曲〈海士〉の文句取り、それをさらりとかわし、秋の季語をさけて「あだし野の原」とし、「あだし野」という古典のイメージと「たばこの灰」のようにという卑近な比喩とを巧みに一句にしている。

瘦のついたるきりぎりす鳴

たしなみやれ過る夜寒と我俤に

(第二、初折裏九句目)

よくよく日頃から慎んでおくがよい、秋はすぐに更けて夜寒の頃となつてゆくのだからと、きりぎりすに言い

掛けた形。「きりぎりす夜寒に秋のなるままに弱るか声の遠ざかりゆく」(『新古今集』秋下)の西行の歌を踏まえながら、初句に「たしなみやれ」と置いた口語調の巧みさで俳諧としている。これらの句さばきには、宗因の連歌による下地が生かされ、自由な談林俳諧の中にも、一本筋の通ったよさが見られる。

『天満千句』第一から、宗因の付句だけをすべて抜き出して見る。

三人は笑つて過る五十年

釈迦の説法出来た僧脇(初折裏六句目)

髪に香炉をたき初の風呂

節小袖きませと斗待宵に(二折表一句目)

本膳はたとへ枯たる木にだにも

殿の威光は飛鳥の糞(二折表八句目)

世間寺とぞ夕暮の露

所領一跡願ふ後生の秋更て(二折裏一句目)

六歳の駒からおちて露ちりて

念仏衆生踊り三味線(二折裏十句目)

堀川の深ひ工があらはれて

古金からかねかし銀の公事（三折表八句目）

以の外鬼のふんどしゆるまりて

其時あさひな名乗夕露（三折裏十句目）

あすの御能は先よしにせう

近年は三間梁の移徒に（名残折表五句目）

ことの葉の褒美まじりに初紅葉

是は当座の秋袷なり（名残折表十句目）

爪の先にて鞠やけぬらん

十露盤に花はほろりと落る共（名残折裏五句目）

どの句も、いかにもさらりと口から流れるようによみ出されていることに気付くのである。

それが、宗因の連歌においても、連歌という枠の中で、従来の連歌とは異なった詩性をたたえていることは、『宗因発句帳』から、いくらか拾いあげることができ、宗因が連歌の代表作としていて、いくつも自筆の写本の現存する延宝二年播州明石浦人麿社法衆の独吟百韻などからもうかがわれる。

古き枕のさびしかたはら

床の上に塵もいく夜かつもるらん

あせたる池にはぶく水鳥

霜氷いたくさえたる朝顔

さきの葉かじけたえぐの道

山守にとへば奥には花もなし

春もつきぬと鐘は入あひ

二折裏の後半をあげたが、この並びからも、その一端は察せられよう。

宗因の本業が連歌にあったことは、前稿にも触れたように、寛文八年四月に九州への旅に出た重頼と、寛文九年四月に小倉に着き、九州各地を巡遊した宗因を迎えて、佐賀や多久の同じ人々が、重頼とは俳諧の、宗因とは連歌の一座を持っていることから知られよう。少なくともこの頃の宗因は連歌師と見られていたのである。宗因以後の西山家が、俳諧とはまったく無縁であったことは、宗因の俳諧が、西山家にとって宗因一人の余技であったことを示している（注10）。秋成が『むかし口』の始めに付した「梅翁伝」に「いみじくもいうように、宗因にとって俳諧は「只連歌のいとまなるたはぶれ」であったが、それゆえにこそかえって放埒に流れてゆく談林俳諧にあっ

て、詩性を保つことができたのであった。

五、芭蕉の場合

拙著『連歌師宗祇』（平成四年八月岩波書店刊）の最後に、私は「宗祇と芭蕉」の一章を付しておいた。この書は問題提起のための書であり、刊行後、早くもその重要な点で金子金治郎氏から反論が出ていて（注11）、すでに訂正すべきことも多い。平成四年十月、伊賀上野芭蕉祭で講演する必要がある、その場とのかかわりからも、また論旨にあまり訂正を加える必要もないと考えたこともあって、この「宗祇と芭蕉」の章を中心に取り上げたのであったが、その直前、芭蕉記念館で伊賀藤堂家の連歌を見るに至り、この章の結論にも訂正を加える必要が生じ、平成五年五月八日の柿衛文庫講座「芭蕉」の第一回到「芭蕉と連歌」の題を与えられた時、訂正を加えながら、ふたたびこの章を取り上げたのであった。その講座の折は、この章の要旨をまず述べたが、ここでは繰り返す必要はないであろう。『笈の小文』に「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、其

貫流する物は一なり」と見えることは、あまりにも著名な芭蕉の言葉であるが、芭蕉は実際に宗祇の文学をどれだけ知っていたのか、その作品をどれほど読んでいたのかということが、私のそもそもの問題提起であり、「芭蕉の生涯の中で、連歌の席に連なつたと想定できる時期をとくに指摘することは困難であつて、まずは連歌の一座に連なることはなかったと考えられるし、さらに連歌の作品をとりわけ読みふけたという形跡も見られない。このことは、芭蕉の場合、具体的に作品を通しての深い理解がなかっただけに、かえつて連歌と紙一重のところに、独自の蕉風俳諧の世界を築くことができたのではなかったか。はじめに宗因の連歌に見る文芸的な実りに基づきに接していたならば、はたして蕉風俳諧は生まれたかどうか疑問であり、芭蕉の連歌に対する知見が少なかったことは、それが逆に幸いして蕉風の俳諧を作り上げる結果となつたのではないかとさえ私は考えているのである」というのが、私の結論であつた。

ところが、芭蕉の場合にも、少なくとも宗房を名乗っていたその出発の時点においては、蟬吟と芭蕉の関係を

めぐって、伊賀藤堂家の連歌の基盤があったことを考えなければならぬようである。伊賀上野芭蕉祭の講演に際して、あらかじめ私の『連歌師宗祇』の「宗祇と芭蕉」の章を読まれていた芭蕉記念館の山本茂貴氏は、講演に先立って記念館蔵連歌資料をあれこれ見せて下さったが、その中に伊賀藤堂家の連歌懐紙があった。蟬吟も芭蕉も一座していないので、この資料は従来から上野の人々にはよく知られていたが、あまり問題にされることはなかったようである。私はこれを見て、即座に伊賀藤堂家に連歌の基盤のあったことに思い至り、直後に私の話そうとしていたことに早速修正を加える必要を痛感して慌てたのであった。私の主張に対して、芭蕉が一座した連歌の作品はないが、芭蕉が連歌に触れた可能性があるのではないか、芭蕉は連歌を相応に知っていたに違いないといった見解を、それとなく私に示された方に、浜千代清・石川真弘両氏があった。浜千代氏は、連歌・連句の実作の経験からか、芭蕉が連歌を知らないはずはないという意見であり、石川氏は以前から、長谷の連歌の基盤との関係、『貝おほひ』を上野の天満宮に奉納したことの意義、

『猿蓑』における急激な伊賀蕉門の増加などから、疑問を示されていた。私は帰宅後早速石川氏に連絡し、石川氏もすぐに伊賀上野に赴き見て来られたので、詳しくは同氏による発表を待ちたいが（注12）、この石川氏の疑問は、伊賀藤堂家の連歌懐紙の存在から、伊賀藤堂家において連歌の基盤のあったことを考え合わせることによって納得がゆくのである。

中世の武将が連歌と深い関係を持っていたことは、従来からよく知られている。ところが、近世の大名家と連歌のこと、それも中世との繋がりの上で検討されたことは殆どなかった。前稿で、少し問題にした三河深溝城主松平家忠の天正五年から文禄三年に至る日記の『家忠日記』に見える深溝松平家の連歌における中心人物であった玄佐・正佐について、立川氏の詳しい考察（注13）があり、深溝松平家においては、連歌は正月佳例連歌と九月尽法楽連歌が恒例であったことが知られる。稽古の為の月次連歌も行われ、家中の玄佐・正佐が指導し、近隣諸所の月次連歌にも出向いている。玄佐は勘解由左衛門康定。正佐も松平氏と見えるが、板倉六右衛門入道正佐

(醒睡笑)と同一人物かと思われ、連歌師ではない。これは家忠の次の代の『忠利日記』にもつながる。このことは中世から近世へ連続する武將の連歌のありかたを示しているのであるが、近年大和大方家所蔵の連歌(注14)に見られる大和筒井氏と、伊賀藤堂家との関わりなども視野に入れると、伊賀上野の城下に、そうした連歌の伝統が培われていたとしても少しも不思議ではなくなってくる。

春雨の柳は全躰連歌也。田にし取鳥は全く俳諧也。

五月雨に鳩の浮巢を見にゆかん

といふ句は、詞にはいひかひなし。浮巢を見に行くと云所、俳也。又、

霜月や鴻のつくぐ双居て

と云発句に、

冬の朝日のあわれ也けり

といふ脇、ことばともに俳なし。ほ句をうけて一首のごとく仕なしたる所俳諧也。詞に有、心に在。其外この句の類、作意にあり。依所一すじにおもふべからず(『三冊子』)

と、連歌と俳諧の違いを説いたことを、芭蕉の俳諧が、連歌と紙一重のところに俳諧の美を打ち立てたものであって、蕉風の俳諧を連歌だという批難に対して、あえてその相違を明らかにしようとした主張であったという理解で私は捉えていたが、いまは若き日に連歌に触れたことを踏まえた上で、改めて考えてみなければならないと思うのである。

ただ、伊賀上野を出奔して江戸に下り、俳諧師として身を立てようとして以後の芭蕉が連歌に一座した形跡のないこと、その江戸においての宗因との接触が、まったく談林の俳諧師としての宗因であって、宗因の詩性豊かな連歌作品には接していなかったこと、宗祇への理解が連歌の作品よりも、俗伝をも踏まえて形成されていた、旅に生涯を送り、旅に死した連歌師というにあり、直接には『筑紫道記』『宗祇終焉記』などよりの影響が大きかったことは、拙著に所収した「宗祇と芭蕉」の論考に詳しく述べておいた通りであらうと思う。

六 おわりに

守武・貞徳・宗因・芭蕉について、ひとわたり辿つて来た私の論は、要するに、守武・貞徳・宗因の場合は、連歌も俳諧もよんでおり、連歌は雅の文芸、俳諧は俗の文芸とする意識をはつきりと持っていた。貞徳の場合は、連歌の時期と俳諧の時期が重ならない点はあつても、彼等が連歌の雅の世界を一方に持っていたことが、いっそう俳諧の俗の世界を際立たせることもなつた。それに対して、芭蕉の場合は、若き日に連歌に接した時があつたとしても、連歌ではなく俳諧にのみ、文芸を考えていた点で大きく異なる。芭蕉は俳諧という文芸に雅俗の融合を図っていたともいうことができよう、ということである。宗因が大阪天満宮連歌所宗匠を勤めていた慶安五年、菅家神退七百五十年万句興行があり、宗春が宗匠の元禄十四年には菅家神退八百五十年万句興行があつて、そこには、前者には顯成・重安・空存ら、後者には惟中・宗岑・如見らの俳諧兼作の作者が見えていることは、拙稿（注15）に触れておいたが、この稿を書いたのちに、天

満宮の寺井家文書の中にある連歌の中から、寛延三年の菅家神退八百五十年万句が見出された。拙稿を補訂すべきいくつかの問題を含んでいるが、それは他日を期することとして、この万句は宗匠昌林をめぐる連歌好事家と、平野・堺の連歌作者らによつて構成され、まったく俳諧にかかわる人の名を見出すことはできなくなっているのである。連歌と紙一重のところに確立された蕉風の俳諧がひろく流行を見た後は、もはや連歌と俳諧をよみ分けるということは困難であり、連歌に変わつて俳諧が地方に浸透し、以後の連歌史と俳諧史が別々の動きを取るようになるのも、もはややむを得ないことといわねばならなかつたのである。

注

- 1 『国語国文』昭和四十年三月、『連歌史の研究』（昭和四十四年三月、角川書店刊）所収。以下前稿という。

- 2 早く中村俊定氏「貞門・談林俳諧における言葉の

意味」(『文学』昭和二十七年十二月、『俳諧史の諸問題』所収)などにも説かれている。

3 中村幸彦博士還暦記念論文集『近世文学 作家と作品』(昭和四十八年、中央公論社刊)所収。

4 昭和五十年、日本学術振興会刊。とくに第五章「神宮神官連歌の隆盛と衰退」参照。

5 『中村俊定先生古稀記念 近世文学論叢』所収。

6 熱田の俳諧については、その後、『寛永十三年熱田万句』『寛永十四年熱田万句 甲』がそれぞれ森川昭・野田千平氏の翻刻により「熱田神宮神官文化叢書」として刊行されている。

7 松永貞徳については、小高敏郎氏『松永貞徳の研究』正統二冊のすぐれた著があり、正編においては評伝が、続編にはその基礎となった資料の考察があり、以後の研究の拠り所となっている。本稿も多きを氏の著に依っている。

8 『文学』昭和四十七年六月(『ことばの内なる芭蕉』所収)

9 注1拙稿、および立川美彦氏「花こそ散らめ 深

溝連歌士玄佐正佐攷」(『国語国文』昭和五十六年十二月、五十七年一月)参照。

10 拙稿「宗因とその後の西山家」(『近世文芸』平成五年七月)参照。

11 金子金治郎氏「宗祇と常縁」『国語と国文学』平成四年七月)

12 「出郷以前の芭蕉」(平成五年十月俳文学会全国大会発表)

13 注9参照。

14 小林健二氏編『大方家所蔵連歌資料集』(平成三年清文堂刊)参照

15 注10に同じ。

〈付記〉

本稿は、かつて『俳句の本 III』(昭和五十五年筑摩書房刊)に書いた拙稿「連歌と俳諧」の一部を取り込んでいる。